

八尾市文化財調査報告41
平成10年度公共事業

八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ

1999.3

八尾市教育委員会



『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』正誤表

箇所	誤	正
P. 12 11行目	淡灰茶色細礫混シルト	淡灰色細礫混シルト
P. 24 12行目	遺物発見を発見した時点では	遺物を発見した時点では

はじめに

八尾市は、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。そして、ここには旧石器時代から連縄と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、八尾市の公共事業に先立つ遺構確認調査の成果の一部を収めております。病院建設に先立つ試掘調査によって古墳時代から近世にかけての遺跡の広がりが明らかになった久宝寺遺跡、心合寺山古墳西側の新池堤体の立会調査、弥生時代後期初頭の集落区画溝や井戸の検出により集落域の広がりが確認された弓削遺跡をはじめ、非常に貴重な成果が得られました。

今後、八尾市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用していくことが、重要な課題となっていくことでしょう。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成10年度に八尾市教育委員会が公共事業に先立ち、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査にあたっては、八尾市教育委員会文化財課技師 米田敏幸、酒 斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、とくに成果のあった調査について、その概要を収録した。ただし、整理作業等の都合から、平成9年度の調査分についても一部収録している。
5. 現地調査・報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。(敬称略・五十音順)
明石信行・浅井紀己子・池田茂樹・岡一雅・岡部和志・片山武志・加茂靖通・補隆義・頃安敏雄
芝山和夫・高田拓・高橋尚子・灰藤秀樹・日高智隆・藤中貴子・松尾実・水谷貴之・山本陵子・
横山妙子
6. 調査一覧表及び調査抄録の作成は、吉田珠己が行った。
7. 本書の作成にあたっては、酒 斎、吉田野乃、藤井淳弘が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は吉田珠己が行った。

本文目次

1. 久宝寺遺跡(98-415)の調査	1
2. 心合寺山古墳 新池堤体改修に伴う立会調査(平成10年度)	7
3. 太子堂遺跡(97-497)の調査	12
4-1. 東弓削遺跡(97-675)の調査 [その1]	16
4-2. 東弓削遺跡(97-675)の調査 [その2]	21
5. 弓削遺跡(97-444)の調査	24
調査一覧表	27

図版目次

図版 1	久宝寺遺跡 (98-415)	機械掘削風景 調査風景 土器集積出土状況
図版 2	心合寺山古墳(新池)立会調査区	調査地(東より) 軒丸瓦(1)出土状況 断面土層状況(西へ4m地点)
図版 3	弓削遺跡 (97-444)	溝内壺出土状況 溝内甕出土状況 井戸内土器出土状況
図版 4	心合寺山古墳(新池)	出土遺物
図版 5	太子堂遺跡 (97-497)	出土遺物
図版 6	太子堂遺跡 (97-497)	出土遺物
図版 7	弓削遺跡 (97-444)	出土遺物

1. 久宝寺遺跡(98-415)の調査

- ### 1. 調査地 大字凌川206番地他3筆

2 調査期間 平成10年11月24日・25日

- ### 3 調查方法

市立病院建設予定地内について、東西方向に3ヵ所の調査区(上面で5m四方)を約50m間隔に設定し、人力と機械を併用して、地表下4.0m前後まで遺構確認調査を行った。西側より第1調査区～第3調査区と呼称する。

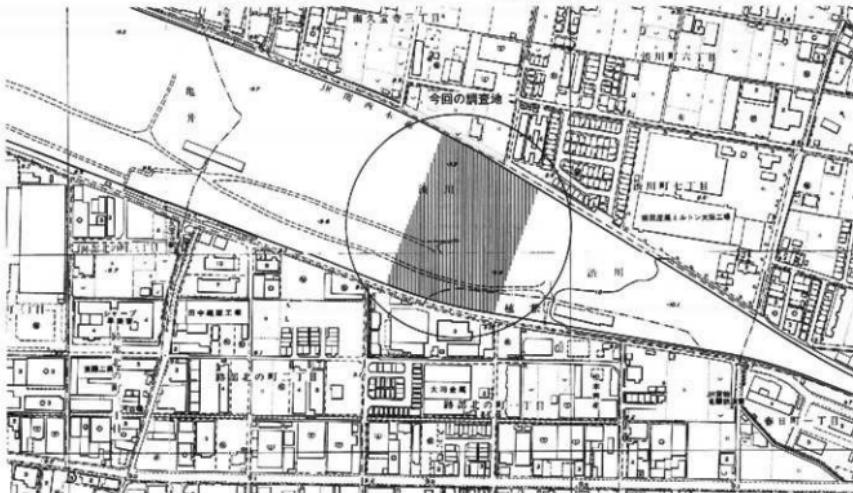
また、建設予定地内は広範囲にわたるため、平成8年度に竜華地区の都市拠点整備に伴って市教委が、実施した造構確認調査〔八尾市教育委員会1997〕の第9区・第13区がその予定地内の範囲になった。そのため、第9区・第13区についての概略も記載することにした。第9区・第13区は、第2調査区のそれぞれ南北約35mの所に位置する。

今回の調査地は、周辺が都市整備に伴って発掘調査が進められている。弥生時代以降の遺構・遺物が多数検出されており、貴重な成果があがりつつある。

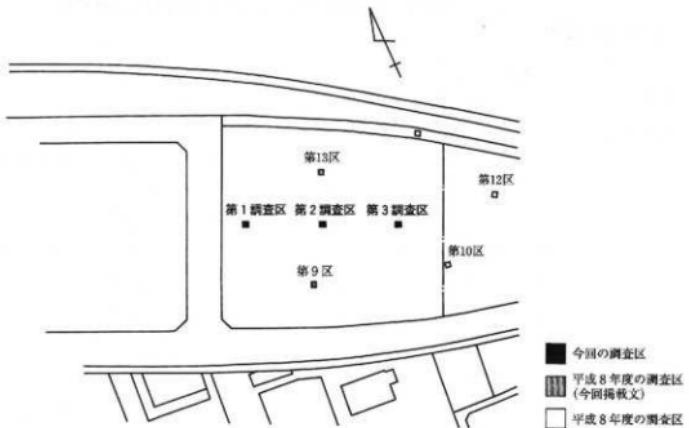
- #### 4. 調査概要

第1調査区) 現地表は、T.P.+9.5mを測る。現地表面から地表下0.9m~1.35mまで、旧童華操車場時代の客土層が堆積する。

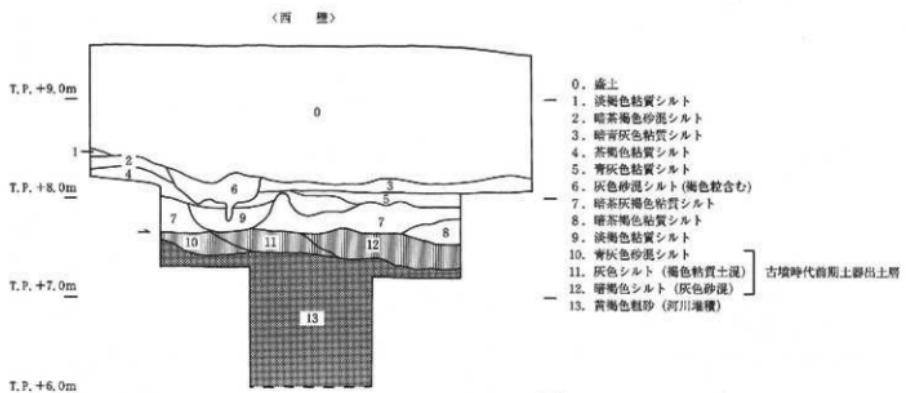
地表下約0.9m(T.P.+8.6m)において、調査区内の南側で東西方向の畝状の高まりが確認できた。そして、北側部分は落ちこんでおり、地表下1.35m~1.6mにかけて旧耕土層となっていた。この畝状の高まり部分には、地表下1.2m~1.5m(T.P.+8.3m~8.0m:層厚約0.3m)の間に土師器、瓦器、羽釜、須恵器(杯身:1)、瓦片が多数含まれている。この層は、遺物包含層となり、何らかの遺構が存在していたと考えられる。時期については、古墳時代後期から奈良時代~中世にかけていたと考えられる。



第1図 調査地周辺図(1/5000)



第2図 調査区設定図(1/3000)



第3図 土層断面図(第1調査区・1/50)

けてと考えられる。

そして、地表下1.5m～1.85m (T.P. +8.0m～7.65m : 層厚約0.35m) の間に、古墳時代前期の遺物が含まれている。遺構面は地表下1.8m～1.85m (T.P. +7.7m～7.65m) 付近の暗茶褐色砂泥シルト層となる。調査区内の西壁側付近において、古墳時代前期の土師器(甕・壺)の集積が見られた。出土した土器は、布留式土器を主としており、布留式甕(2)の完形品や布留傾向壺上半部(3)、直口甕(4)がある。出土層位は(10～12)層で、ほぼ地表下2.0m前後(T.P. +7.5m付近)に集中している。これらの器は、土層断面の状況から北へ落ち込む、溝状遺構内の遺物の一部と考えられ、最深部で約0.25mの深さを測る。

以下、地表下2.1m (T.P. +7.4m) から調査範囲となる地表下3.3m (T.P. +6.2m) まで河川堆積層が続き、底面は確認できなかった。

第2調査区 現地表はT.P. +9.6mを測る。現地表面から地表下0.7m (T.P. +6.9m) までは、操車場時代の客土層が堆積する。そして、この客土層直下に幅約2.6m、深さ約0.8mの溝状の切り込みを確認している。操車場造営以前は、北側に向かってやや地形が落ち込んでいたと考えられ、これは河川もしくは用水路等の溝であった可能性が高い。

第1調査区と同様に畠状の高まりを地表下1.55m (T.P. +8.05m) で確認している。出土遺物は小片ながら土師器・須恵器・瓦片が含まれており、この層が地表下2.15m (T.P. +7.45m : 層厚約0.6m) まで続く。そして、第1調査区の遺構面に対応すると考えられる層を地表下2.15m (T.P. +7.45m) で確認している。

以下、第1調査区で見られた河川堆積層は確認できず、地表下4.2m (T.P. +5.4m) まで植物遺体を含んだシルト～粘土層が続く。

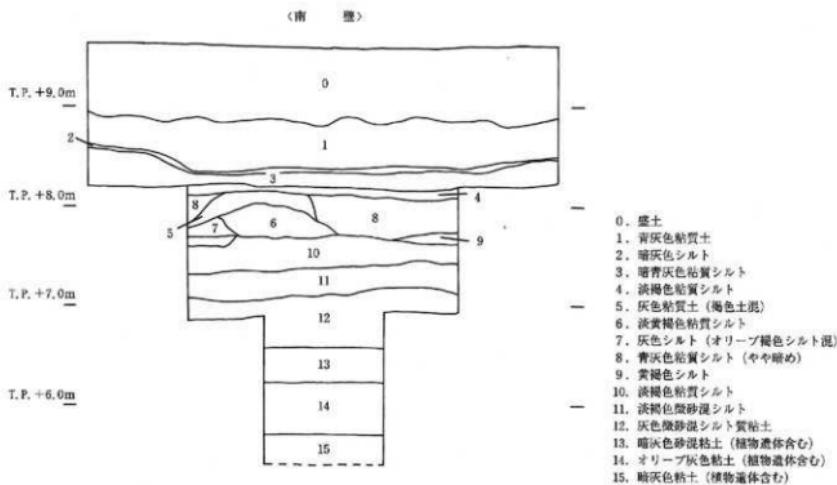
第3調査区 現地表はT.P. +9.7mを測る。現地表面から地表下0.7m (T.P. +9.0m) までは、操車場時代の客土層が続く。そして、第2調査区と同様に旧状地形が北側に向かって落ち込んでおり、地表下1.4m付近まで続く。

地表下1.5m～1.65mに陶器や土師器・須恵器・瓦等の近世の遺物を含む層を確認している。そして、地表下1.8m付近(T.P. +7.7m)が、第1調査区の遺構面に対応すると考えられるが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

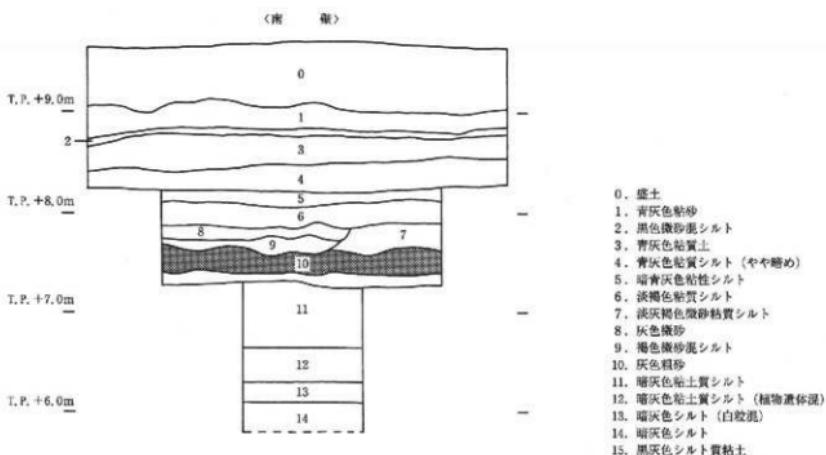
地表下2.05m～2.3m (T.P. +7.65m～7.4m : 層厚約0.25m) の間に、河川堆積層を確認しているものの、その層厚は薄く、東側には大きく広がらないと考えられる。以下、地表下3.9m (T.P. +5.8m) までシルト～粘土層が続き、遺構・遺物とともに確認できなかった。

[第9区の概要] 第2調査区の南側の調査区。現地表T.P. +9.55mを測る。地表下1.4mまでは、客土層が続く。以下、地表下2.2m前後(T.P. +7.35m前後)において、須恵器甕や杯身・土師器を含む古墳時代後期末の落ち込み状遺構を検出している。そして、これに対応する遺物包含層が、地表下1.8m～2.2m (T.P. +7.75m～7.35m : 層厚約0.4m) の間の層になる。

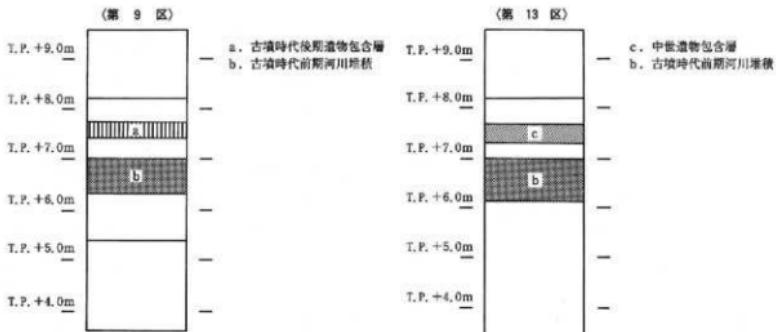
以下、地表下2.55m～3.25m (T.P. +7.0m～6.3m : 層厚約0.7m) が、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺物を含む河川堆積層となる。そして、地表下4.25m



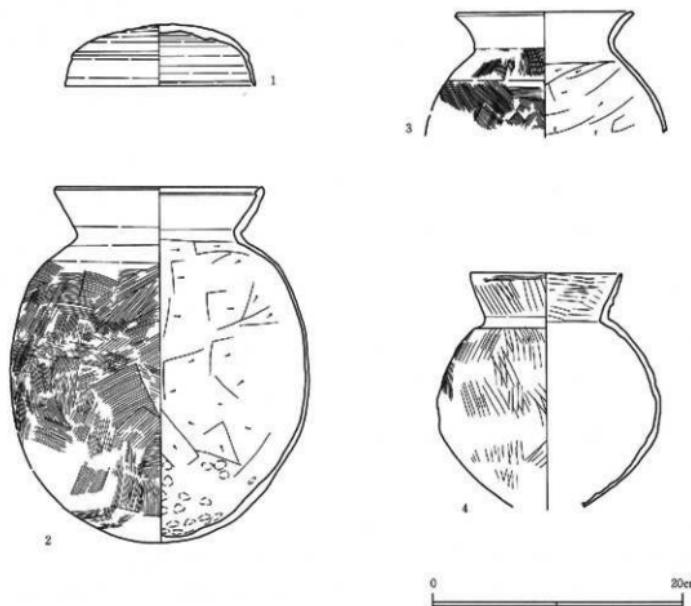
第4図 土層断面図(第2調査区・1／50)



第5図 土層断面図(第3調査区・1／50)



第6図 95-565の土層模式図(1/100)



第7図 出土遺物実測図(1/4)

(T.P. +5.3m)より掘削範囲以上(地表下6.0m付近)続く、微量の土器細片を含む河川堆積を確認している。

[第13区の概要] 第3調査区の北側の調査区。現地表T.P. +9.6mを測る。地表下1.4mまでは、客土層が続く。以下、地表下1.9m(T.P. +7.7m)まで近世の耕作土層が続く。また、同時期のものと考えられる深さ約2.2mの素掘りの井戸等を確認している。

そして、地表下1.9m~2.3m(T.P. +7.7m~7.3m)において少量の土師器・須恵器を確認しているものの、顯著な遺構等は確認できなかった。

以下、地表下2.6m~3.45m(T.P. +7.0m~6.15m)が、古墳時代前期の河川堆積層が続く。さらに、地表下6m(T.P. +3.6m)まで、遺構・遺物ともに確認できなかつた。

5.まとめ

1. 今回の調査区において、客土層が層厚約1m未満に対し、平成8年度の南北の試掘調査の調査区では約1.4m厚であった。これは、旧状地形の高低差に伴う整地層の差によるものである。

2. 第1調査区・第2調査区では、客土層・旧耕土層以下、畝状の部分に古墳時代後期~中世の遺物包含層が存在しており、その上面が地表下1.2mから1.55mとやや幅を持つ。その層厚も約0.3m~0.6mとなる。しかし、下面の遺構面検出面は、地表下2.0m~2.1m前後(T.P. +7.5m前後)で、ほぼ同一であった。

また第9区では、地表下2.2m付近(T.P. +7.35m)で古墳時代後期の遺構面を検出している。これらの時期の遺構面は、後世の耕作等により削平を受けていることが考えられ、その深度・層厚にややばらつきが見られた。

これらの時期は、調査地北側にある渋川廃寺との関連も注目され、何らかの遺構が依存している可能性があり、興味深い。

3. 第1調査区で検出した地表下2.0m前後(地表下7.5m付近)の古墳時代前期の土器集積は、該期の集落の存在を想定できるものである。但し、他の調査区では確認できなかつた。

4. T.P. +7.5m~7.0m前後で検出した古墳時代前期以前の河川堆積層は、東に行くにつれ、その層厚が薄くなる傾向を示す(西側では層厚約1.2m以上、東側では約0.25m)。そして、北側では、層厚が厚くなる(第13区・大阪府95-3区)。5ヶ所の調査区ではそれぞれ違った様相を示しており、複雑な流路形成となっていると考えられる。

5. 上記の河川堆積層以下では、今回の調査範囲においては、弥生時代後期以前の遺構・遺物等は確認できなかつた。

(藤井)

[参考文献]

(財)大阪府文化財調査研究センター 1996『久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書』

八尾市教育委員会 1997『久宝寺遺跡(95-565)の調査』『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書II』

(財)八尾市文化財調査研究会 1998『久宝寺遺跡第22次調査・第23次調査』

『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

2. 史跡心合寺山古墳新池改修に伴う立会調査(平成9年度)

1. 調査地 八尾市大竹5丁目地内
2. 調査期間 平成10年1月27日、28日
3. 調査方法 八尾市下水道部河川課による新池堤体改修工事に伴い、現況堤体の内法面の保護のため擁壁が設置されることとなった。当工事については平成9年5月16日付で現状変更許可済である。文化庁の指導に基づき、現況法面の切土は極力腐植土のみに留める工事がなされた。本調査報告はこの平成9年度の法面切土に伴う立会調査である。なお擁壁基礎部分については、平成9年度の本課の試掘調査(平成9年度報告済)に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会により本発掘調査が行われた。
4. 調査概要 腐植土の除去は新池南側、堤体内側法面の約24.5mの区間で行われた。現況はほとんどが腐植土が残存していたが、一部堤体の抉れている部分で土層断面の観察を行った。7-A層直上及び8-B層から近現代の陶磁器片が出土した。7-A層、6層から瓦片、埴輪片、サヌカイト片が出土した。土層及び出土遺物のありかたから、3層、6層、7-A層、7-B層、9層、10層が旧の堤体構成層となる可能性がある。この土層は灰白色系の小礫混砂質土であり軟質である。これは心合寺山古墳の墳丘構成層と類似しており、墳丘を削平した上で堤体が造られた可能性がある。この堤体については平成9年度の試掘調査(第1区)報告では、平安時代を下限とするかとみられる瓦片が出土することから、平安時代以降のものとして報告した。本年度の(財)八尾市文化財調査研究会による新池西側の樋管の取り替えに伴う発掘調査では、旧の堤体が数回の画期をなして累積する状況が確認されており、本調査地と同レベルの堤体は平安時代末以降、近世までは下らない時期とみられている。^(注1)



第8図 調査地周辺図(1/5000)

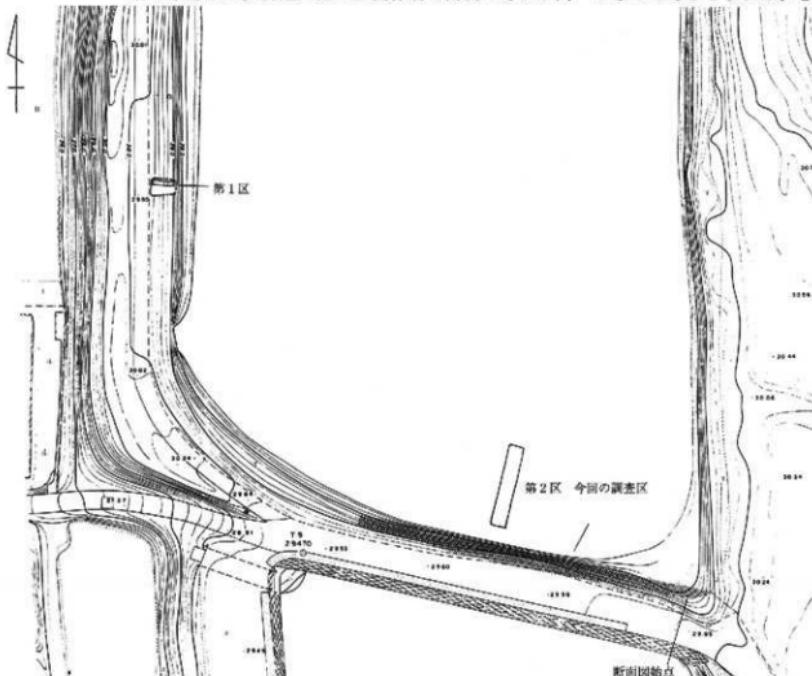
のことから本調査地で確認した旧堤体構成層も同期のものとみておきたい。

5. 出土遺物

軒丸瓦片、平瓦片、丸瓦片、埴輪片、須恵器片、サヌカイト片等がコンテナにして1／2箱分出土した。1は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。2～4は格子目タタキの平瓦、5は縄目タタキの平瓦、6、7は丸瓦で凸面は長軸方向のナデがみられ、タタキの痕跡はない。1は心合寺推定地の既往の調査で確認されている、心合寺独自の瓦当文様を有する軒丸瓦である。瓦当面は摩滅が著しいが、丸瓦部の一部まで遺存している。成形時の瓦当部と丸瓦部との接合の際に多量の粘土が補填されている。全体に作りは粗雑であり、丸瓦部の上面には補填粘土と瓦本体との接合後のナデ調整が不充分なため、粘土の縦目が明瞭に残存している。丸瓦部上面の一部に縄目タタキの痕跡が一部残存している。色調は淡灰色、焼成は軟質である。胎土は非常に粗く、径1cmまでの花崗岩起源とみられる長石、石英、金雲母、黒雲母がみられた。心合寺山古墳東方山麓部の砂礫に比定されている。なおサヌカイト片については心合寺山古墳の史跡整備に伴う発掘調査で確認されている最下段の旧地形を利用したとみられる墳丘構成層である、弥生時代後期の包含層に関係するものとみられる。

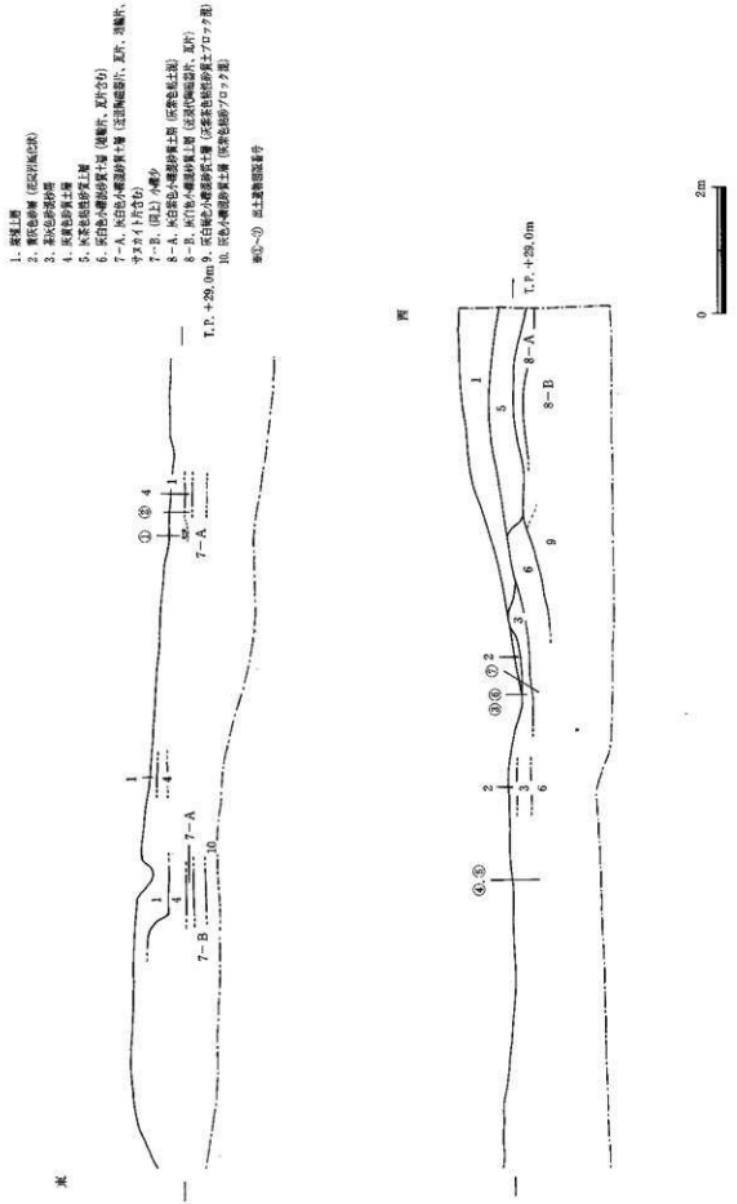
6. まとめ

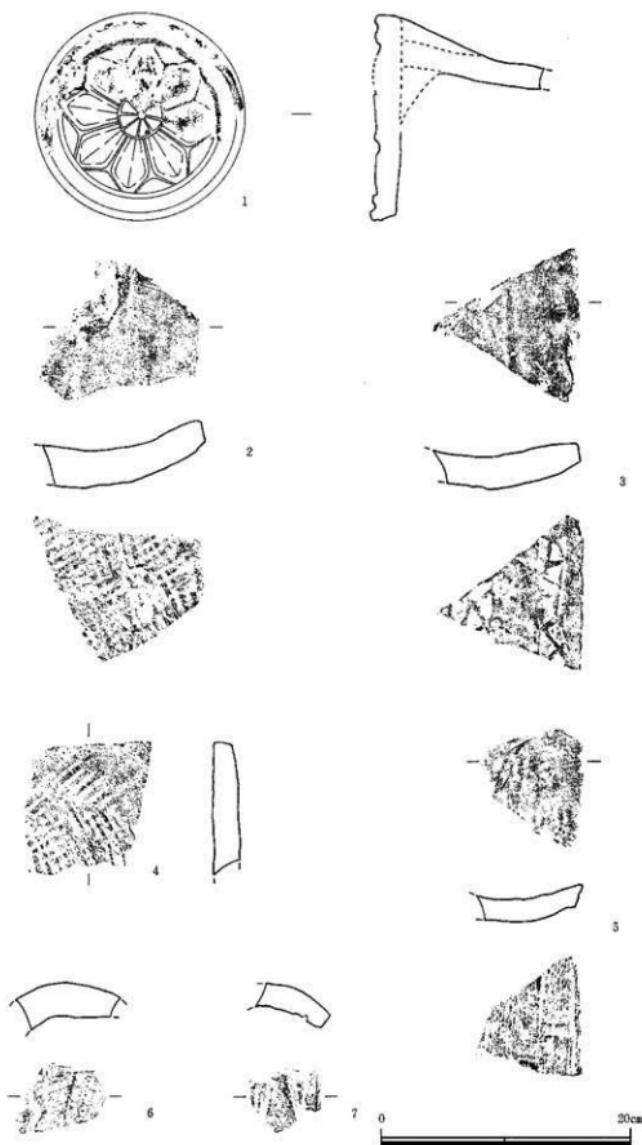
本調査地では新池の西側で確認された旧堤体層の一部と対応するかとみられる土層を確認した。新池西側の旧堤体層と南側のそれが同一のものであるとすれば、心



第9図 調査区設定図(1/400)

第10図 調査区土層断面図(1/80)





第11図 出土遺物実測図(1／4)

合寺廃絶後、平安時代末以降に溜池が築造され、現況新池と同じ位置に堤が造られたことになる。が、今回の調査は新池南側の堤体のごく一部の土層を観察できたにすぎない。古墳時代の心合寺山古墳に伴う堤の有無を含め、今後の調査・検討課題である。

(吉田野乃)

(注1) (財)八尾市文化財調査研究会の成海佳子氏にご教示いただいた。記して謝意を表します。

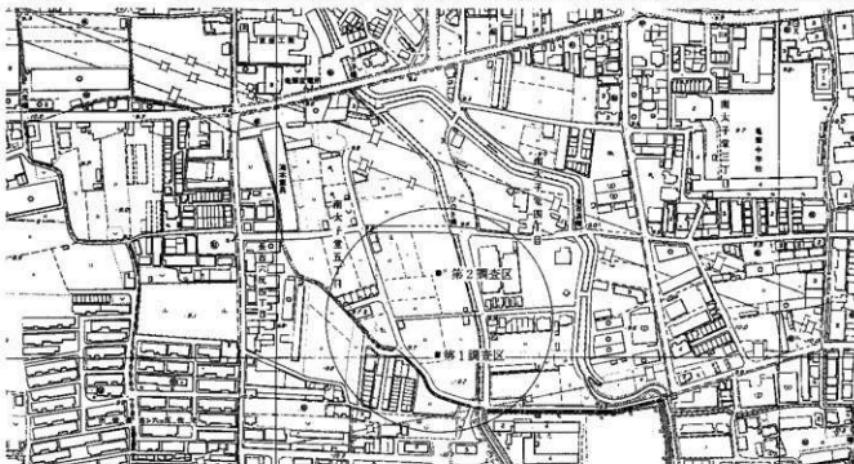
(注2) 八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏にご教示いただいた。記して謝意を表します。

番号	調査区	出土層	器種	部位	法量(cm)	焼成	色調	胎上	調 整	備考
1	立会	1層	單井八葉 瓶蓋文軒 丸瓦	瓦当部 上半～ 丸瓦部	残長 13.6	軟	淡灰色	非常に粗	丸瓦部凸面：一部縦目タタキ残存 丸瓦部凹面：布目底(6本/cm)	全体に摩滅著しい。
2	立会	4層	平瓦	小片	残巾 13.0	やや 軟	淡茶灰色	非常に粗	凹面：布目底(10本/cm)、側縫部ナデ? 凸面：斜格子タタキ、側縫部ナデ 側端部：長軸方向ケズリ	
3	立会	3層	平瓦	小片	残巾 11.6 側端巾 1.4	硬	淡茶灰色 ～灰色	非常に粗	凹面：布目底(9本/cm)、側縫部長軸方向 ナデ 側端部～凹面側縫：長軸方向ケズリのち長 軸方向ナデ 凸面：斜格子タタキのち一部ナデのよりス リケシ	
4	立会	6層付近	平瓦	小片	残長 10.7 側端巾 1.4	軟	淡灰茶色	非常に粗	凹面：布目底(10本/cm) 凸面：斜格子タタキ 側縫部：糸切痕残存	全体に摩滅著 しい。
5	立会	6層付近	平瓦	小片	残長 8.3 側端巾 1.9	軟	灰色	粗	凹面：布目底(9本/cm)、側縫部長軸方向 ナデ 凸面：斜格子タタキ(5本/cm) 側端部：ナデ、ヘラ切り時の線状痕跡？	
6	立会	3層	丸瓦	小片	残巾 8.4	硬	暗灰色	非常に粗	凹面：短軸方向ナデ 布目底(12本/cm)、一部長軸方向ナ デ	
7	立会	6層	丸瓦	小片	残巾 5.9	硬	暗灰色	粗	凸面：側端部、凹面側縫：長軸方向ナデ 凹面：布目底(18本/cm)、一部斜め方向ナ デ	凹面：長軸方 向縫跡あり

出土遺物観察表

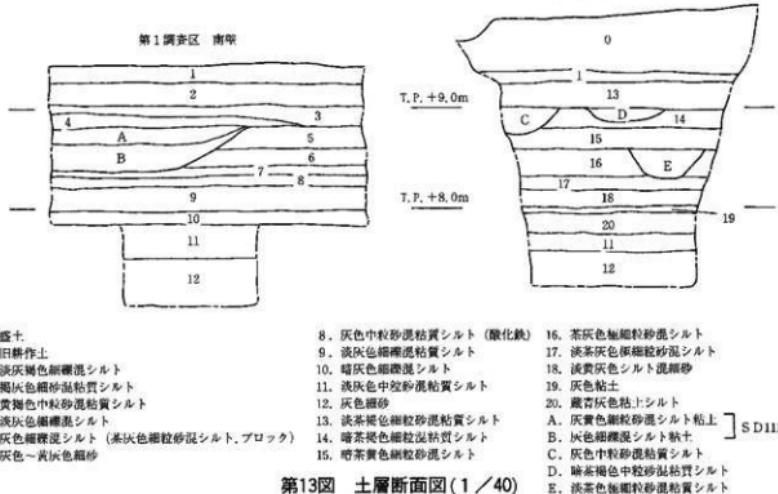
3. 太子堂遺跡(97-497)

1. 調査地 南太子堂4・6丁目地内
2. 調査期間 平成10年1月14日・20日
3. 調査方法 道路築造に伴う公共下水道工事に先立ち遺構の有無を確認するため、3m×3mの調査区を2ヶ所設定し、重機と人力を併用して地表下約2.5mまで掘削を行い、土層断面の観察及び平面精査による遺構の検出を実施した。
4. 調査概要 現況は水田として利用されており、周辺の道路面とは0.5m程度の高低差がある。また、南側に設定した第1区(No.29人孔周辺)には工事のための仮設道路が敷設されていたため、本来の水田面より高くなっていた。
- 第1調査区 第1調査区(No.29人孔付近)…本調査区では3面の遺構構築面を検出した。時期は出土遺物から10世紀～12世紀頃とみられる。
- 溝(S D111) 第1面は水田面より0.65m下の淡灰茶色細礫混シルト(T.P+9.0m前後)で、南北方向の溝(S D111)と土坑(S K111)を検出した。溝は西肩を検出しただけであったが、検出幅約1.9m、深さ約0.4mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が灰黄色細粒砂混シルト粘土、下層が灰色細礫混粘土シルトであり、土師質の甕、皿、鍔釜などの細片や須恵器片、瓦(平及び丸瓦)、軽石などが出土している。土坑は径0.55mの円形を呈し、深さ0.32mで灰色細礫混シルトを埋土とするが、遺物は出土しなかった。
- 土坑(S K111) 第2面は灰色中粒砂混粘質シルト上面(T.P+8.35m前後)で、小穴1基が検出された。小穴は調査区外にのびるが、梢円形を呈し、長径0.47m以上、短径0.38m、深さ0.17mで埋土は灰色粘土であるが遺物は出土していない。この2面は黄灰色細砂で覆われており、粘性が強く、層内が攪拌された様子が窺われ、足跡がみられる。
- 足跡

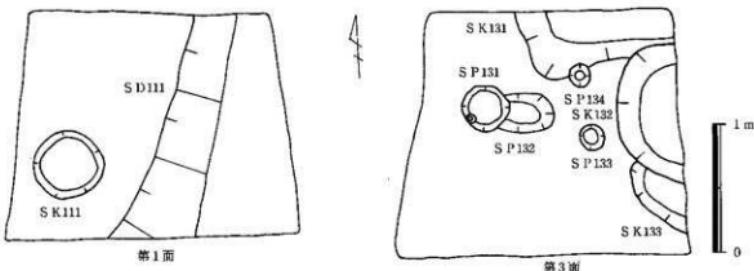


第12図 調査地周辺図(1/5000)

第2調査区 北壁



第13図 土層断面図(1/40)



第14図 第1調査区遺構平面図(1/50)

ことから水田面の可能性をもつてゐる。水田構築層には土師器、須恵器、黒色土器、平瓦等多くの遺物を含んでおり、洪水砂等に堆積した土層を新たに耕作面として整地したことが考えられる。

小穴・土坑

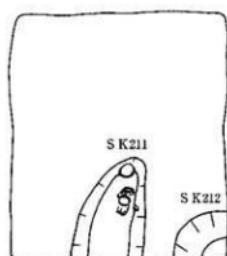
第3面は淡灰色細礫混粘質シルト上面(T.P.+8.25m前後)で、小穴4基(S P131～134)と土坑3基(S K131～133)を検出した。遺構の法量等は下記にまとめた。

番号	形状	大きさ(m)	地 上	出 土 遺 物	備 考
SK311	方形?	検出長辺1.35×検出短辺0.7×深さ0.09	灰色中粒砂混粘土	土師器片、松ぼっくり	調査区外にのびる。
SK312	円形	検出直径1.4	暗灰色粘土シルト	土師器杯片他、須恵器片	調査区外にのび、SK311、SP311を切る。
SK313	楕円形	検出長辺1.35×検出短辺0.7×深さ0.09	暗灰色中粒砂混粘土シルト	—	調査区外にのびる。
SP311	円形	径0.24×深さ0.06	暗灰色中粒砂混粘土	土師器皿(手探ね)(1)	SP312を切る。
SP312	椭円形	幅0.4×深さ0.08	暗灰色中粒砂混粘土	須恵器片	
SP313	円形	径0.24×深さ0.06	暗灰色粘土シルト	—	
SP314	円形	径0.24×深さ0.07	◆	—	SK311を切る。

表1. 第3面検出遺構法量表

第2調査区

第2調査区(No10人孔付近)…遺物は耕土直下よりみられ、2時期の遺構面を検出した。出土遺物より第1面は12世紀初頭、第2面は8～9世紀以降とみられる。

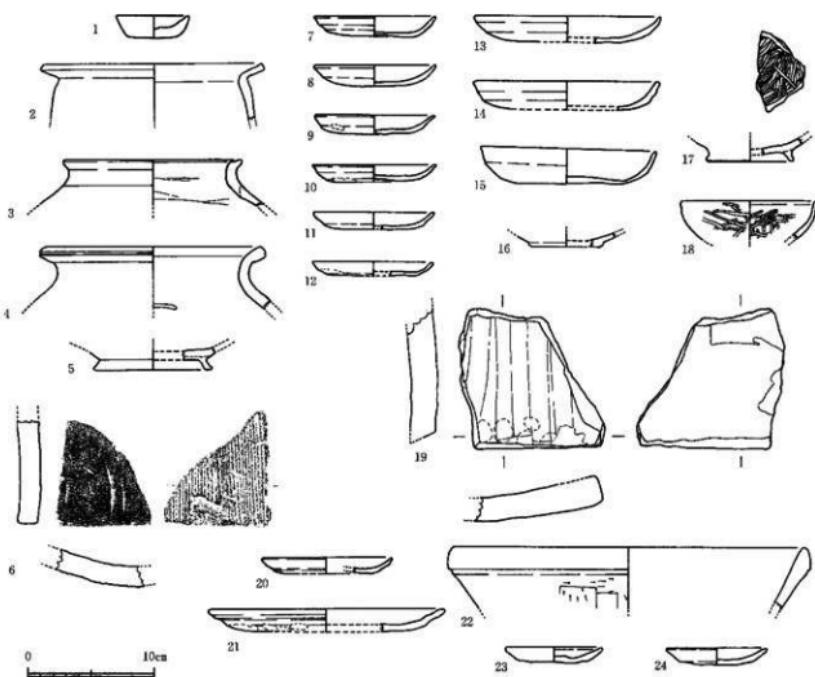


第15図 第2調査区第1面
平面図(1/50)

第1面は耕作上より0.3m下の暗茶褐色細粒砂混粘質シルト(T.P+9.00m前後)で土坑2基(SK211・SK212)を検出したが、いずれも調査区外にのびる。SK211は楕円形を呈しており、検出長約1.05m、短辺約0.7m、深さ約0.14mを測る。埋土は暗茶褐色中粒砂混粘質シルトで、土師器皿(7～15)、縁軸陶器片(16)(軟陶、削りだし高台)、瓦器碗片(17, 18)、黒色土器片、瓦片(丸瓦、平瓦(19))、砥石などが出土している。とくに土師器皿は、4枚(7～10)が裏返しにされて重なった状態で見つかっている。

SK212は円形を呈するとみられ、検出長0.5m、深さ0.24mを測る。埋土は灰色中粒砂混粘質シルトで、遺物は出土していない。

第2面は茶灰色極細粒砂混シルト上面(T.P+8.58m前後)で、土坑1基(SK221)を検出した。SK221も調査区外にのびるが、円形を呈する



第16図 出土遺物実測図(1/4)

とみられ、深さ0.27mを測る。埋土は淡灰茶色極細粒砂混粘質シルトで、遺物は出土していない。このため時期は明確ではないが、上部層である15層より、細片だが頸部を強くナデて段をもつ壺や外面へラミガキをしている杯片、須恵器壺など8世紀から9世紀の特徴を備える遺物が出土しており、これを上限としておきたい。

また、耕作土より約1.8m下(T.P+7.56m前後)の灰色細砂層からは磨滅した庄内壺片が見つかっており、古墳時代までに埋没した流路があるものと推定される。

遺構に伴わない
遺物 第1調査区ではとくに8層灰色中粒砂混粘質シルトで土師器壺・皿・高杯・鍔釜、須恵器壺・杯・摘み付き杯蓋、黒色土器B類、平瓦(凸一縄目タタキ、四一布目)など9~10世紀の遺物が細片ながら多数出土している。図化したものは口径が体部よりひらく土師器壺(2)、口縁端部が外反する土師器壺(3)、玉縁状の口縁に沈線を巡らす須恵器壺(4)、須恵器杯脚部(5)、須恵質の平瓦(6)がある。一部に8世紀代の遺物含まれていることからその時期の遺構も存在しているものと推定される。

第2調査区は前述の15層以外では第1面の包含層である13層と第1面構築層である14層で遺物が出土している。13層では土師器、須恵器、瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質擂鉢が細片であるが見つかっている。図化したものは土師器皿(20, 21, 23, 24)と瓦質擂鉢(22)である。土師器皿(21)は内面全体を丁寧にナデており、外面底部に指頭痕が残るが、口縁部をナデ、外反する形態など古い要素をもつ。瓦質擂鉢(22)は外面をヘラケズリしており、15世紀頃に比定される。こうした遺物を包蔵していることから第13層は攪拌ないしは整地されたものと考えられる。

14層では図化できる遺物はなかったが、土師器皿、瓦器椀、青磁(図版6下部)、白磁、平瓦(凸一縄目タタキ、四一布目)が出土している。

5. まとめ

調査地点は旧大和川の支流である古平野川の流路に近接している。航空写真を見る限りでは河川が蛇行している外側に位置しており、氾濫現象に伴う洪水などの影響を受けているためか、条里が乱れている。古平野川自体は幾度かその流れを変えているであろうが、調査地近辺では奈良時代の遺物が確認できることから、8世紀代には埋没したことが分かる。

今回の調査では第1調査区で10~12世紀にかけての溝、土坑、小穴、水田相当面を、第2調査区では9~12世紀の土坑、溝を検出した。このうち第2調査区のSK211では廃棄された土器が見つかった。また、8世紀代から15世紀にかけての遺物が出土している。

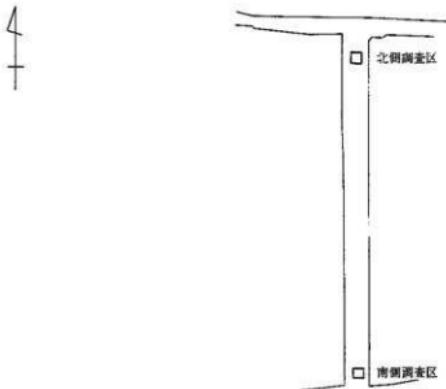
こうした結果から、鑑みても古平野川が埋没した8世紀代以後、すなわち、奈良時代以降の、安定し土壌化した地表面に集落が形成されていったといえよう。(道)

4-1. 東弓削遺跡(97-675)の調査 [その1]

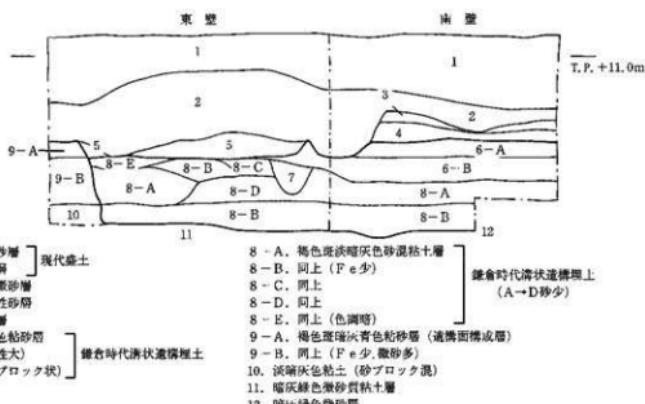
1. 調査地 八尾市八尾木東1丁目地内
2. 調査期間 平成10年3月30日～4月1日
3. 調査方法 公共下水道の開削工事による管路埋設に先立ち、管路の北側と南側の人孔埋設予定地に2m四方の調査区を設定し、地表下1.5m前後まで確認した。
4. 調査概要(北側調査区)
地表下0.84m、TP+10.28m前後の4-B層上面で、南北方向の近世の溝を検出した(第1遺構面)。2条の溝は切りあっており、古い方の近世溝1は底面に平安時代以降とみられる平瓦(12)を敷いているのが、南壁断面にかかる状態で確認できた。新しい方の近世溝2には木樋が埋設されていた。これは近世の水路に伴う遺構とみられる。さらに地表下0.88m、TP+10.24m前後で溝状遺構1条を検出した(第2遺構面)。この遺構の切り込み面は第11層になるとみられる。これは調査区の西壁にかかる状態であったが、最大検出幅0.5m、最大深0.64mを測る。
- 埋土は、暗灰色粘性砂層、暗灰緑色粘性砂層で4つの層に細分でき、暗灰色粘性砂層には有機物が多く含まれていた。ここからは13世紀頃かとみられる土師器小皿片、中国陶磁器の青磁の壺片に混じって黒色土器片、須恵器片が出土した。溝の肩は急傾斜をなして落ち込んでいる。8-C・8-D層はこの溝状遺構の埋土堆積後に掘りこまれたとみられる遺構の埋土である。第2遺構面構成層である11層には13世紀代とみられる瓦器椀片、土師器小皿片に混じって、土師器の手の字状口縁皿片・壺片、黒色土器B類の椀片等が出土した(2、4、5、11)。このことから11層は鎌倉時代の包含層で、溝状遺構は同期の遺構とみられる。11層の下の12層からは10世紀～11世紀に位置付けられる黒色土器片、土師器の椀・皿・壺片等が出土した(7～



第17図 調査地周辺図(1/5000)

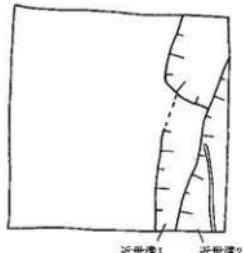


第18図 調査区設定図(1/1000)

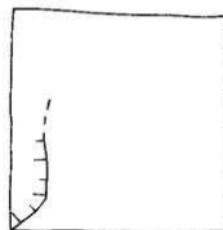


第19図 南側調査区土層断面図(1/40)

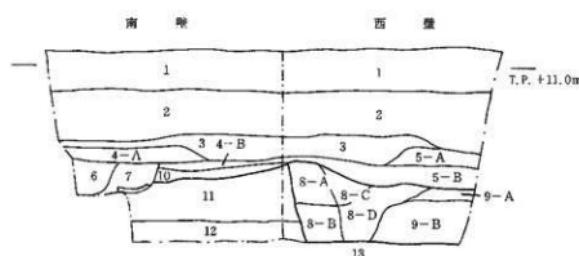
4



第1造構面



第2造構面



1. 黄茶灰色砂質土層

2. 線灰綠色粘沙層

3. 暗灰色粘沙層

4-A. 淡灰綠色粘沙層

4-B. 同上 (色調暗, 粘性大) - 近世陶器片含む。第1造構面構成層

5-A. 淡灰綠色粘沙層

5-B. 同上 (色調暗)

6. 灰色粘土層 - 近世溝2 墓土

7. 灰色粘泥粘沙層 - 近世溝1 墓土

8-A. 暗灰綠色粘沙層

8-B. 同上 (砂多)

8-C. 同上 (粘性大, 色調暗)

8-D. 同上 (粘性大)

9-A. 暗灰色粘性砂層 (有機物多)

9-B. 同上 (砂多, 黏混, 有機物多)

10. 灰色粘沙層

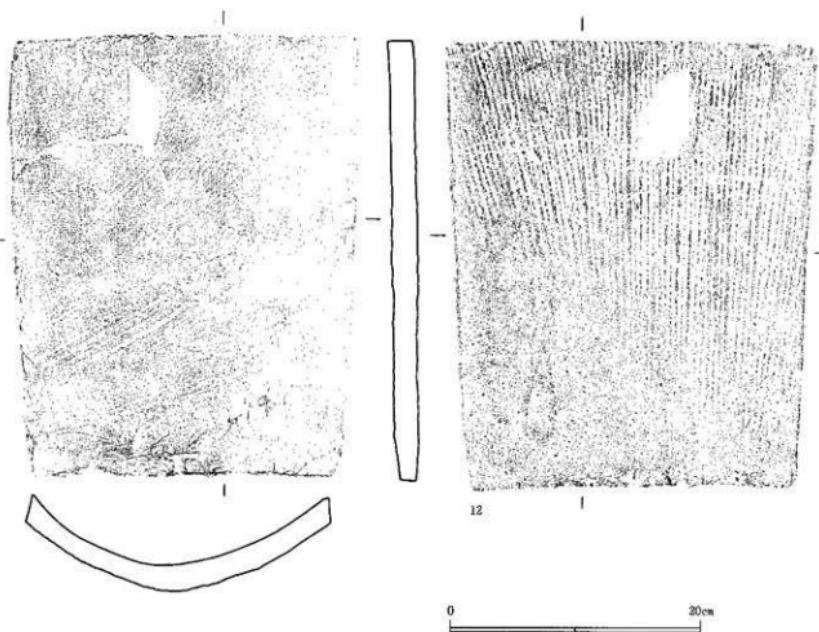
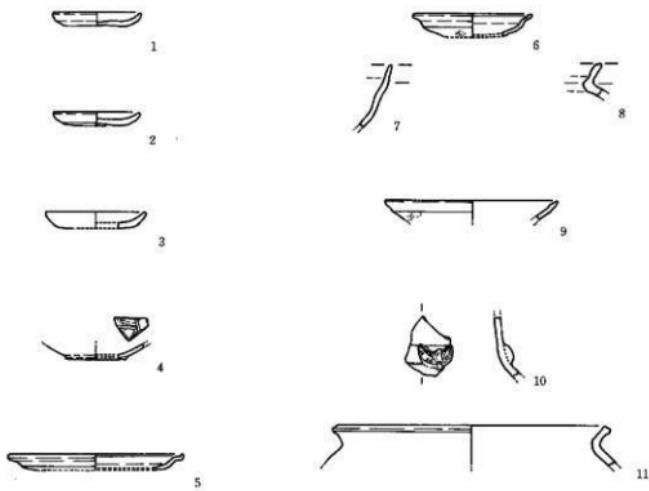
11. 茶灰綠色粘沙層 (第2造構面構成層 - 鎌倉時代包含層)

12. 淡灰綠色粘性砂層 (平安時代包含層)

13. 暗灰綠色砂層 (土師器片含む)

鎌倉時代
淡灰綠色粘性土

第20図 北側調査区 平・断面図 (1/40)



第21図 出土遺物実測図(1/4)

9)。12層は平安時代後期の包含層になる可能性がある。溝状造構の底面となる13層には土師器片が少量含まれていた。

(南側調査区)

ここでは断面確認であったが、地表下0.84m、TP +10.3mの9-A層を切り込む東西方向の溝状造構を確認した。これは溝状造構の北肩のみを確認したが、東壁では検出最大幅2m、最大深0.76mを測る。埋土は褐色斑灰色粘砂層、褐色斑淡灰砂混粘土層で8つの層に細分できる。灰色砂層がブロック状に含まれる部分があった。北肩は急傾斜をなして落ち込む。埋土のあり方から溝状造構になるかとみられる。埋土から瓦器枕片、土師器羽釜片、須恵器片、瓦片、漆器片、国産陶磁器片等に混じって、製塩土器かとみられる小片が出土した。このことから鎌倉時代の溝状造構と考えられる。

5.まとめ

当調査地では近世の水路に伴う溝、鎌倉時代の溝状造構、平安時代後期の包含層を確認した。鎌倉時代の造構、包含層には平安時代後期の遺物が混入しており、当調査地付近に当該期の造構の存在する可能性が高い。北側調査区で出土した近世溝に転用された平安時代以降とみられる平瓦も注意される。当調査地南側では平安時代前期の寺院もしくは官衙になるかとみられる造構の存在を示唆する遺物が出土している。当調査地付近は三条西公条の「吉野詣記」に記された金剛蓮華寺の推定地であり、近隣の善立寺には平安時代末以降とみられる単弁六葉蓮華文軒丸瓦が保管されている。当調査地で確認した平安時代後期の造構を示唆する遺物及び鎌倉時代の溝状造構はこれと関連性をもつ可能性があり注意される。

(吉田野乃)

番号	調査区	出土層	器種	部位 発見年	法 量(cm)	焼成	色 調	施上	調 整
1	北側調査区	11層(第2面 ベース層)	土師器 小皿	口縁部 底部 1/6	口径 壁高 6.9 1.1	軟	淡乳橙色	やや粗	底面外面:ナデカ 口縁部外面~内面:横方向ナデ
2	北側調査区	11層(第2面 ベース層)	土師器 小皿	口縁部 底部 1/6	口径 壁高 6.8 1.05	軟	淡灰乳色	良	口縁部外面~内面:横方向ナデ 底面外面:ケズリのちナデ
3	北側調査区	第2面 溝状造構埋土	土師器 小皿	口縁部 底部 1/6	口径 壁高 8.0 1.3	非常に 軟	淡乳橙色	非常に良	外面:摩滅のため不明 内面:横方向ナデ
4	北側調査区	11層(第2面 ベース層)	瓦筋 枕	口縁部 底部 1/5	高台径 残高 4.6 1.3	普通	暗灰色	やや粗	外面:古右駄付部分横方向ナデ他はナデ 内面:暗文
5	北側調査区	11層(第2面 ベース層)	土師器 皿	口縁部 底部 1/9	口径 壁高 13.9 1.3	軟	灰乳白色	良	口縁部外面:横方向ナデ 底面外面:ケズリのちナデ 内面:摩滅により不明
6	北側調査区	11層付近か	土師器 皿	口縁部 底部 1/9	口径 壁高 9.4 1.8	軟	暗灰乳色	良	口縁部外面~内面:横方向ナデ 体部外面:ユビオサエ、ナデ
7	北側調査区	12層	七輪器 鉢	口縁部 ~体部	口径 残高 5.0	普通	淡橙色	粗	口縁部外面:横方向ナデ 体部外面:ケズリのち不定ナデ 体部内面:不定ナデ
8	北側調査区	12層	土師器 皿	口縁部	残高 2.6	やや良	乳白橙色~ 橙色	粗	口縁部内外面~肩部外面:横方向ナデ 腹部内面:ユビオサエ、クテナデ 肩部内面:不定ナデ
9	北側調査区	12層	土師器 皿	口縁部 ~体部	口径 残高 13.7 1.6	普通	淡灰灰色	やや粗	口縁部外面~内面:横方向ナデ 体部外面:ユビオサエ
10	北側調査区	11層付近	中国陶磁 青磁?	腹部	口径 残高 4.8	淡緑色	精良		外面:施釉均一、貫入極く僅かにあり。
11	北側調査区	11層(第2面 ベース層)	土師器 皿	口縁部 ~底部 1/12	口径 残高 21.4 3.3	やや粗	淡赤橙色	非常に粗	口縁部内外面~肩部外面:横方向ナデ 肩部外面:一部不定方向ナデ 頸部~肩部内面:一部不定方向ナデ
12	北側調査区	第1面 近世溝~底面	平瓦 ほね瓦形	ほね瓦形	長軸長 短軸及 開閉印 35.4 23.5 2.0	やや軟	淡灰色~黑 灰色	非常に粗	凹面:右日東(9本/cm)、系切り裏 面:左日東(9本/cm)、横方向ヘラクズ 凸面:綱目底(2本/cm)、施れ跡みられる 開閉印:長軸方向ヘラケズリのちナデ

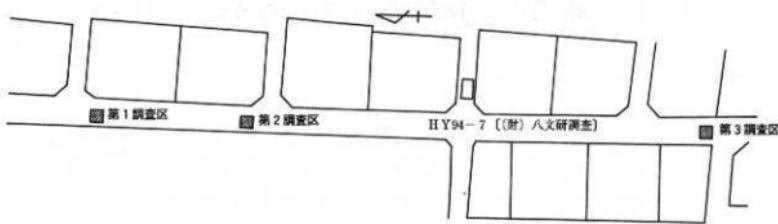
観察表

4-2. 東弓削遺跡(97-675)の調査 [その2]

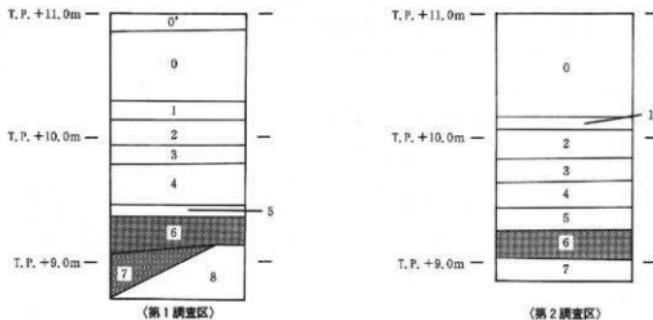
1. 調査地 八尾木東1丁目地内
2. 調査期間 平成10年5月11日～13日
3. 調査方法 公共下水道工事に先立ち、人孔設置箇所3ヵ所について $2\text{m} \times 2\text{m}$ の範囲で、地表下2.3m前後まで遺構確認調査を行った。なお、調査区は、南北方向のはば一直線上にあり、北側から第1調査区～第3調査区と呼称する。
4. 調査概要 第1調査区 現地表は、T.P.+11.0mを測る。地表下1.05m～1.2mの淡青灰色細砂に少量の土師器・瓦器が含まれていた。中世頃の洪水砂と考えられる。
以下、地表下1.65m～2.2m(T.P.+9.35m～8.8m)の暗灰色シルト質粘土(6層)～暗灰色粘土層(7層)から、古墳時代前期の土器片が多数出土している。この層からは、複合口縁壺上半部(1)や壺上半部(2)、小型丸底壺(3)、ミニチュア土器(高杯脚部?:4)の破片が出土している。これらの出土遺物は、南から北へ向かって落ち込んでいく溝状遺構の一部の遺物と考えられる。
- 第2調査区 現地表は、T.P.+11.0mを測る。調査区の上層は、搅乱を受けており、一部土層のみの確認となった。そして、地表下1.65m～1.95m(T.P.+9.35m～9.05m)の暗灰色シルト質粘土層(6層)が、第1調査区の古墳時代前期の層に対応すると考えられる。顕著な遺構は検出できなかったものの、土師器の小片は多数出土しており(吉備系壺口縁部:5)、該期の遺物包含層が南にも広がっていることを示している。
- 第3調査区 現地表は、T.P.+11.25mを測る。調査区のはば中央に近世の井戸があり、搅乱されていた。そのため、地表下1.5m前後までは土層の確認のみとなっ



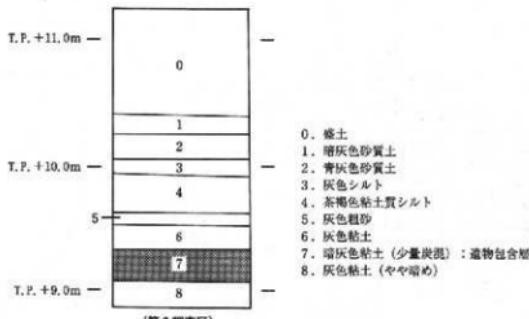
第22図 調査地周辺図(1/5000)



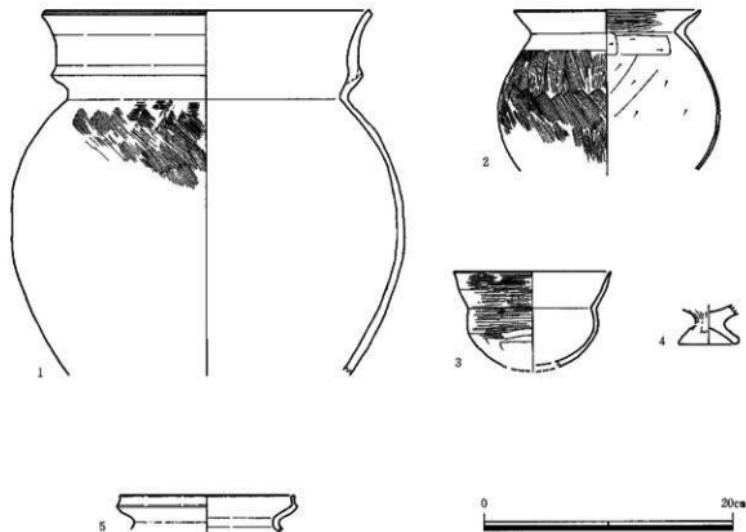
第23図 調査区位置図(1/100)



- 0'. アスファルト
- 0. 盛土
- 1. 暗灰色粘質土
- 2. 淡青色シルト混砂質土
- 3. 淡青色細砂
- 4. オリーブ灰シルト混粘土
- 5. 灰色微砂泥シルト
- 6. 暗灰色シルト質粘土：遺物包含層
- 7. 暗灰色粘土：落ち込み埋土
- 8. 灰色粘土（やや暗め）
- 0. 盛土
- 1. 暗灰色砂質土
- 2. 青灰色シルト混微砂
- 3. 灰色微砂
- 4. 灰オリーブ色シルト混粘土
- 5. 灰色シルト質粘土
- 6. 暗灰色シルト質粘土：遺物包含層
- 7. 青灰色シルト質粘土



第24図 土層模式図(1/40)



第25図 出土遺物実測図(1/40)

た。そして、地表下1.3m~1.6mの茶褐色粘土質シルト層(4層)より羽釜・土師器が出土しており、中世の遺物包含層となる。

そして、地表下1.95m~2.2m(T.P.+9.3m~9.05m)の暗灰色粘土層(7層)が古墳時代前期の遺物包含層となり、土師器が出土している。ただし、第1・第2調査区の遺物に比べ、少量で小片の土器を主体としており、図化できるものはなかった。

5.まとめ

3つの調査区でT.P.+9.3m~9.0mの間に古墳時代前期(庄内式期~布留式期)の遺構・遺物包含層を確認した。3ヶ所ともほぼこの高さで検出しておらず、東弓削遺跡における該期の集落域の広がりを考える上で、重要となろう。周辺の既往の調査でも該期の遺構を検出している。但し、今回の調査では、南側の調査区に行くほど、遺物包含層中の土器の出土量、構成等がやや少なくなるようであった。

(藤井)

[参考文献]

- 原田昌則 1993 「東弓削遺跡(第4次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』
 清 翁 1993 「東弓削遺跡(91-373)」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書II』
 成海佳子 1998 「東弓削遺跡(第7次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告61』

5. 弓削遺跡(97-444)

1. 調査地 弓削町2・3丁目地内

2. 調査期間 平成10年2月27日～3月6日

3. 調査方法 本調査地は遺跡範囲の外であったが、近辺に弥生時代から奈良時代の複合遺跡である弓削遺跡や弥生時代の集落を包括する田井中遺跡に近く、今回公共下水道工事に係る立孔(8m×7m)の掘削に伴い、立会い調査を実施した。

この結果、地表下約2.3mで遺物を発見した。急遽、八尾市下水道課及び、施工業者と協議を行い、遺構の性格を明確にすることと遺物の採取を中心とした調査を行うこととなった。残念ながら、日程の都合で立孔の一部を調査するに留まり、さらに雨中でも調査を継続し、覆工板でおおわれているとはいえ、相当な雨水が立孔内に流れ込み十分な調査を行えなかった。

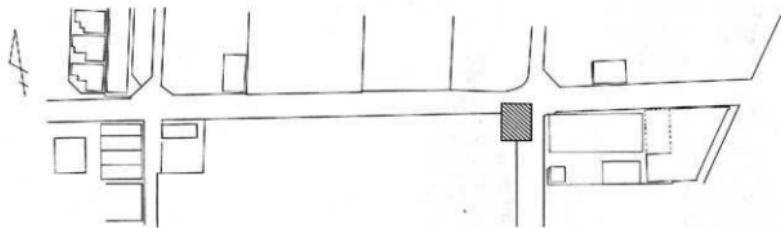
4. 調査概要 遺構検出面は地表下約2.3m、T.P+11.0m前後の淡灰緑色極細粒砂混シルト層で、溝及び井戸を検出した。遺物発見を発見した時点では、すでに上部層の掘削が終了しており、遺構の本来の切り込み面は不明である。このため、遺構構築面の高さは検出面と異なっている可能性もある。これについては後述する。

溝は北西の角から南東にのび、調査区の中央付近で南方へ屈曲するようである。東肩と西肩の一部を検出したに過ぎないが、検出長約5m、幅約3.8m、深さ約0.8mを測る。断面形状はレンズ状を呈しており、埋土は暗緑灰色細粒砂混粘土シルトと淡灰緑色シルト粘土の2層に分けられ、多くの遺物を含んでいる。

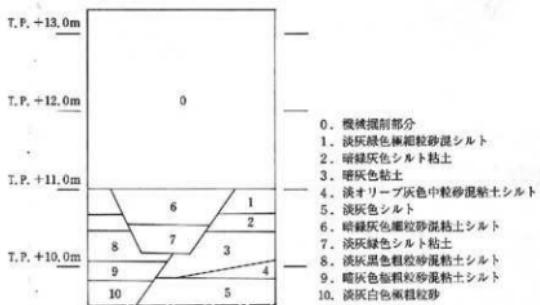
井戸は中央付近の東端で検出した。そのため、大半が鋼矢板に区切られた調査区外にのびるため、本来の法量、形状は明確ではない。しかし、検出状況では円形を呈



第26図 調査地周辺図(1/5000)



第27図 調査位置図(1/1200)



第28図 土層断面模式図(1/50)

5. 遺物について 短頸壺(1・2)は底部が突出していない平底で、内外面はハケメ調整を施している。

長頸壺(3)は中位の張る部体をもち、外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整を施している。小型の細頸広口壺(4)は口縁下部に双孔を穿ち、外端面に竹管文で加飾している。口縁から頸部付近には朱がみられる。広口壺(5)はヘラミガキを全体に施している。壺(6・7)は内面を綫位のヘラケズリを施す。(6)は受口状口縁外端面に沈線を施す。(7)は体部外面は板状工具によるナデを行っている。高杯(8)は外面及び杯部内面はヘラミガキ、受部内面は板状工具によるナデ、脚部裾内部はヘラケズリ。器台(9)は外面をハケの後ヘラミガキを施し、8条の沈線を施す。口縁端部は沈線と竹管文で加飾する。

これらの土器は弥生時代後期初頭の特徴を有しているものといえる。

6. 備考

昭和59年度に(財)八尾市文化財調査研究会によって弓削遺跡内で行われた調査では幅3.5~4 m、深さ1.2~1.5 mの溝(以下、大溝)が検出され、4層の埋土からコンテナ約150箱の遺物が出土している。大溝の検出高はT.P+11.5m前後であった。

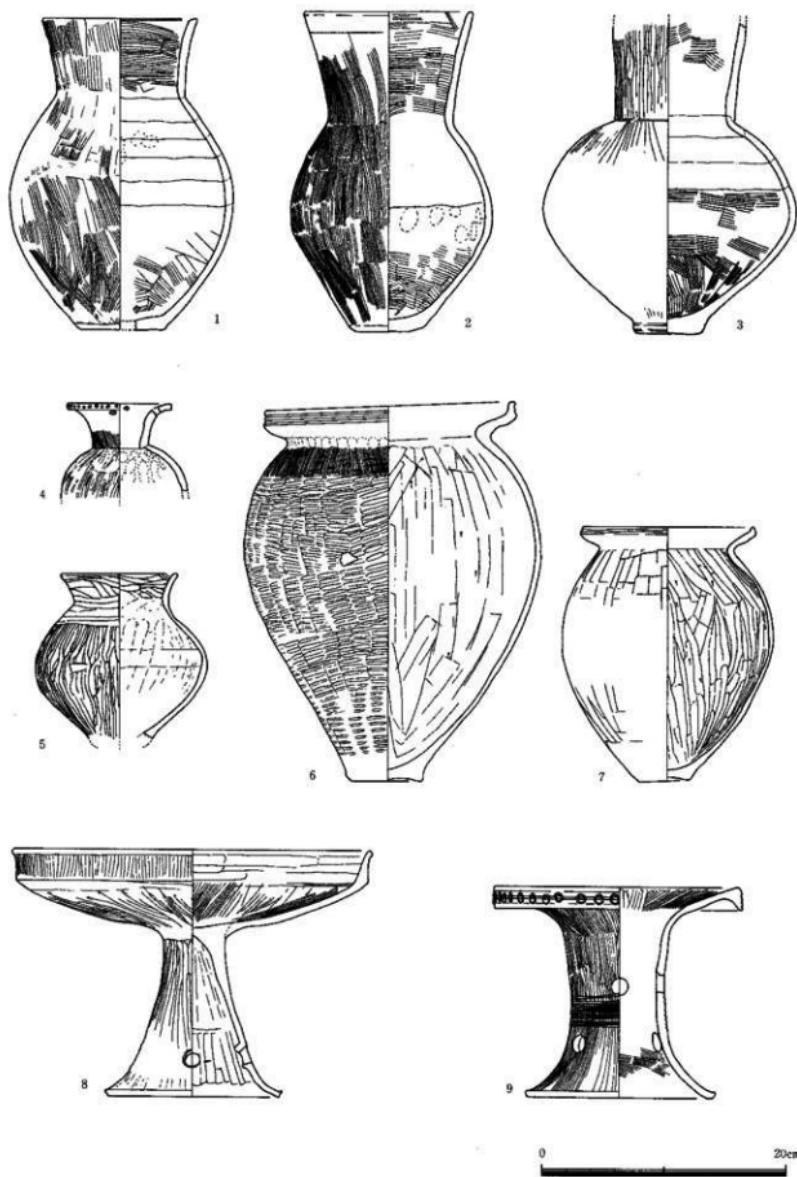
しかし、溝の幅は今回の溝と同じであり、検出高(T.P+11.0m)を大溝検出高に合わせると溝内の埋土の深さもほぼ合致する。ただし、大溝の遺物は弥生後期から庄内初頭と時期幅が存在し、今回の溝とは時期が異なっている。現時点では大溝出土遺物の実測図が公表されていないが、今後の展開を待ち、検討していきたい。(消)

参考文献

西村公助「弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会 1985年

すると考えられる素堀りの井戸であり、検出幅約2 m、深さ1.45 m以上を測る。埋土は粘土やシルト粘土を主体とするがブロックが随所に見られ、また炭化物を含むなど人為的に埋められたことが分かった。埋土内からは長頸壺や器台など、多くの遺物が出土している。

両者から出土した遺物は壺、甕、高杯、鉢、器台など多岐に及んでいる。今回図化した1~9はいずれも溝から出土したものである。



第29図 出土遺物実測図(1/4)

図 版

機械掘削風景



調査風景



土器集積出土状況



図版 2 心合寺山古墳(新池)立会調査区

調査地
(東より)



軒丸瓦(1)出土状況



断面土層状況
(西へ 4 m 地点)



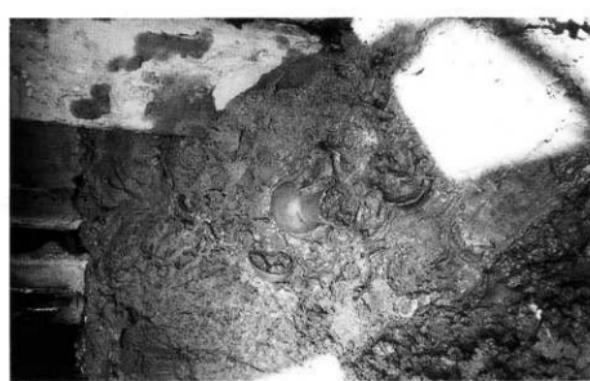
溝内壺出土状況



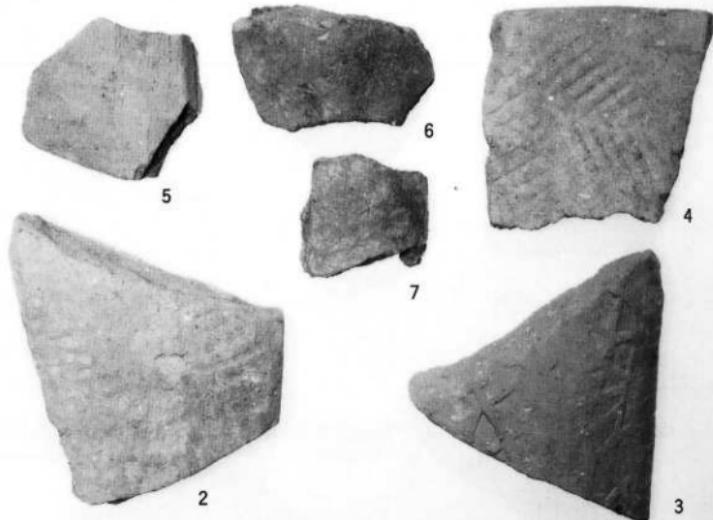
溝内壺出土状況



井戸内土器出土状況



図版 4 心合寺山古墳(新池)出土遺物



丸瓦・平瓦



軒丸瓦（1）瓦当面



軒丸瓦（1）上面より

図版 5 太子堂遺跡（97—497）出土遺物



1



7



8



9



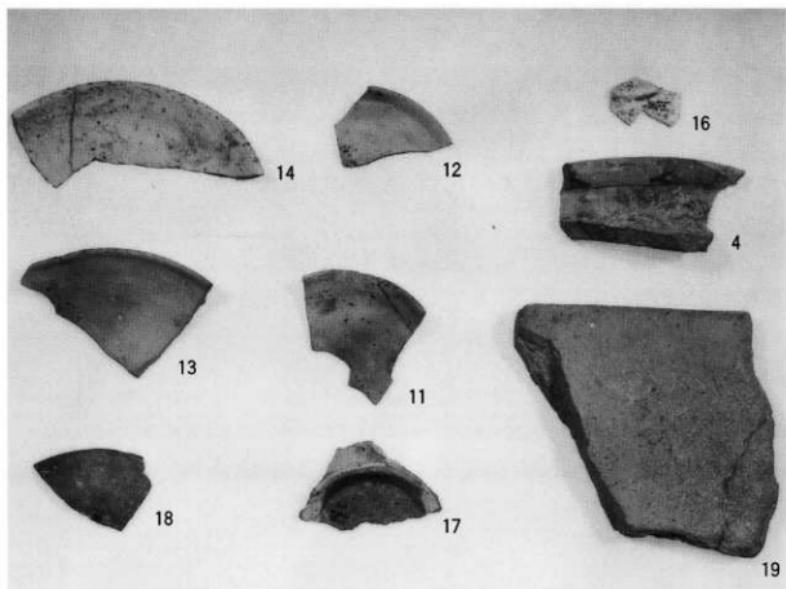
10



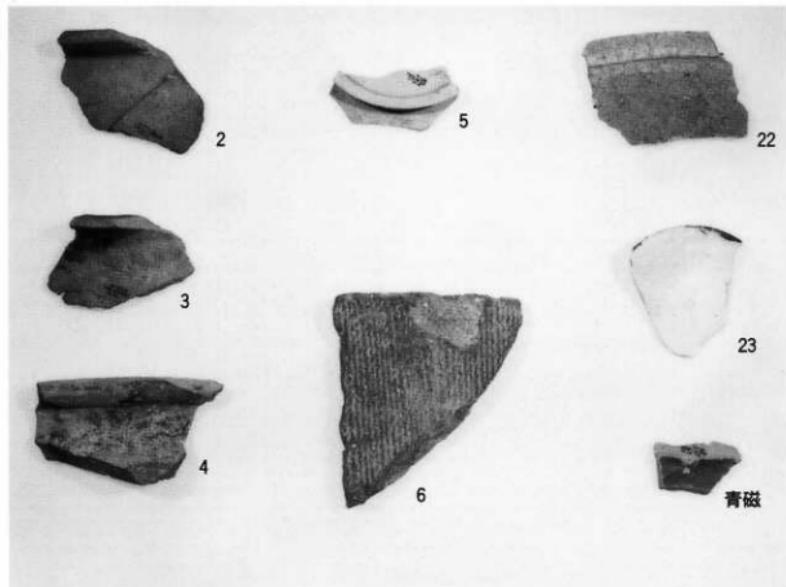
15

S P 131及びS K 211出土遺物

圖版 6 太子堂遺跡 (97—497) 出土遺物

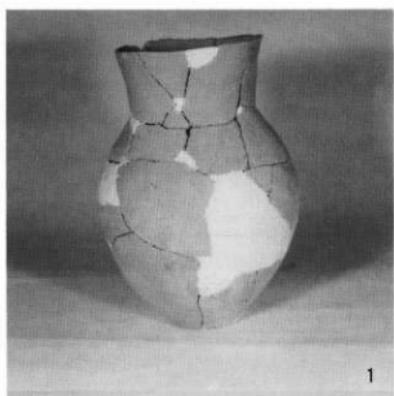


SK 211出土遺物



包含層出土遺物

圖版 7 司前遺跡（97—444）出土遺物



1



5



6



7



8



9

報告書抄録

ふりがな	やおしないいせきへいせい10ねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書II						
副書名	平成10年度公共事業						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	41						
著者名	米田敏幸・酒井・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎ 0729-91-3881						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北 緯 東 経	調 査 期 間	調査面積 (m ²)	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号				
久宝寺遺跡	大阪府 八尾市 大字茨川町	27212		34° 37' 04" 38° 35' 10° 24'	135° 35' 24"	75	病院建設に伴う遺構確認調査
心合寺山古墳	八尾市 大竹	27212		34° 36' 28" 38° 35'	135° 37' 15"	40	堤体改修に伴う立会調査
太子堂遺跡	八尾市 南太子堂	27212		34° 36' 28" 35° 15"	135° 35' 15"	18	公共下水道工事に伴う 遺構確認調査
東弓削遺跡	八尾市 八尾木 八尾木東	27212		34° 36' 25" 36° 02"	135° 37' 10"	8	公共下水道工事に伴う 遺構確認調査
	八尾市 八尾木 八尾木東	27212		34° 36' 28" 36° 37' 10"	135° 37' 10"	12	公共下水道工事に伴う 遺構確認調査
弓削遺跡	八尾市 弓削町	27212		34° 35' 37" 35° 03"	135° 37' 03"	56	公共下水道工事に伴う 遺構確認調査
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
久宝寺遺跡	集落	中近世 古墳時代	島岳状造構 落ち込み	土師器 須恵器			
心合寺山古墳	古墳	古墳時代・白鳳～平安時代	堤体(平安時代以前)	瓦 墓輪 陶磁器			
太子堂遺跡	集落	平安時代	溝・ビット 土坑	土師器 須恵器 瓦器 瓦 黒色土器			
	鍾乳時代	溝 土坑		土師器 瓦器 瓦			
東弓削遺跡	集落	平安～鎌倉時代・近世	溝 土坑	土師器 須恵器 瓦器 瓦 黒色土器 陶磁器 製塙土器			
	近世	井戸 包含層		土師器 瓦器			
	古墳時代前期	溝状造構 包含層		土師器 弦生土器			
弓削遺跡	集落	弥生時代	溝 井戸	弥生土器			

**八尾市文化財調査報告41
平成10年度公事業**

八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書II

発行日 1999年3月

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581-0038 八尾市本町1-1-1

TEL (0729) 24-8555

<八尾市刊行物番号H10-79>

